

イソヒヨドリ 英: Blue Rock Thrush 学: *Monticola solitarius*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ツグミ科

全長	♂ 224.7mm (215-232)	♀ 221.4mm (212-227)
自然翼長	♂ 120.6mm (115-130)	♀ 117.1mm (111-121)
露出嘴峰長	♂ 21.4mm (19-25)	♀ 20.8mm (21-22)
尾長	♂ 80.5mm (75-86)	♀ 77.0mm (74-83)
ふ蹠長	♂ 30.6mm (29-34)	♀ 30.5mm (29-32)
体重	♂ 62.0g (57-69)	♀ 57.3g (47-63)

* 2010年から2011年に琉球大学構内(沖縄県)で捕獲したオス13個体、メス7個体の計測値に基づく。

羽色:

オスは頭部から背、上尾筒にかけて明るい青色で、胸から下尾筒にかけての下面と下雨覆いは赤褐色。翼と尾は黒褐色である。メスは上面が灰黒褐色で、顔から胸、腹、下尾筒にかけての体下面が黄色みを帯びた褐色で、黒褐色の横斑または鱗状斑がある。

鳴き声:

繁殖期のオスは「ホイピーーチョ」「ヒーチョイピー」などと美しい声でさえずる。同じ個体のさえずりでも複雑なパターンがあり、個体によって異なるさえずりのレパートリーを持っている。繁殖期に外敵が巣に近づいたときには、頭と尾を交互に上下させながら「ヒヒヒヒヒヒ、グエグエグエ」という警戒声を発する。沖縄島では7～9月の冬期にむけてのなわばりの防衛期にもさえずりの回数が増加する。

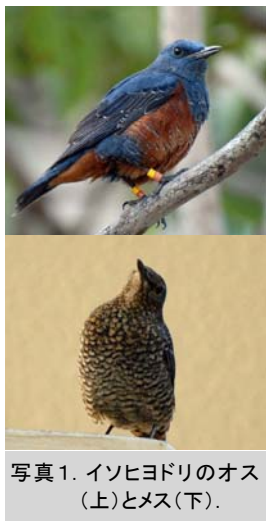


写真1. イソヒヨドリのオス(上)とメス(下)。

2. 分布と生息環境

分布:

アフリカ北部および地中海沿岸のヨーロッパ諸国からヒマラヤ、中国、ベトナム、ロシア、日本、マレー半島、スマトラに繁殖分布する(日本鳥類目録編集委員会2000, Dickinson 2003)。日本で繁殖する亜種 *M. s. philippensis* は、満洲、ウスリーランド、韓国、日本、中国東部、台湾で繁殖し、渡り性の個体は中国南東部から東南アジアで越冬する。日本では北海道などの北日本では夏鳥、温暖な地域では留鳥である。

生息環境:

イソヒヨドリの学名は「山に生息する(*Monticola*)単独性の(*solitaries*)鳥」を意味し、分布地の大部分では本種は高山帯の岩場に生息している。一方、日本では、和名が示すとおり、主に海岸の岩場(磯)に生息し、繁殖している。

最近では海岸だけでなく内陸部での繁殖例が増えており、海岸線から内陸部へと繁殖分布を拡大させている可能性がある。沖縄島では海岸から約2.5km離れた琉球大学構内で1982年には既に多くのイソヒヨドリが繁殖していた。近畿地方では、おそらく1990年代以降になって内陸部での繁殖例が増えている(和田岳氏私信)。インターネットの情報などによると2000年代には内陸部でイソヒヨ

ドリが繁殖期に観察された例が全国各地で報告されていることから、内陸部への繁殖分布の拡大は徐々に北上しているのかもしれない。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
繁殖期 (つがい形成～家族期) 換羽期 非繁殖期

一夫一妻制(まれに一夫二妻の場合もある)で年1～2回繁殖する。メスのみが抱卵を行う。ヒナへの給餌はオスとメスが共に行う。巣立ち後のヒナをオスとメスの親鳥が分担して育てる「ヒナ分け」と呼ばれる行動がみられる。

巣:

枯れ枝や枯草を敷き詰めた椀型の上部開放巣を作る。海岸の岩場では崖の岩の上や岩の隙間、岩場の灌木の中に作る。巣の大きさは外径22×21cm、厚さ約10cm、内径(産座)約10×10cm、深さ約4cmである(柿澤・小海途1999)。琉球大学構内では、建物のひさし部分、雨樋のすき間、コンクリートの角穴、機械の隙間、換気口の中、シーサー(建物に備え付けられる獅子の像)の口の中などに営巣している。半数以上のペアが古巣を利用する。



写真2. 琉球大学構内。複雑な凹凸のあるビルと樹木の豊富な大学構内はイソヒヨドリの格好の繁殖場となる。

卵:

一腹卵数は平均4.9(3-6)卵。卵は淡緑青色無斑で、長径21～29mm、短径18～20mm。

抱卵、育雛期間、巣立ち率:

沖縄島では3月中旬から産卵を開始する。抱卵開始から孵化までは約15日間で、育雛期間は15～18日間である。巣立ち率(巣立ちヒナ数/卵数)は82.7%(n=162)。巣立ち後17～25日間は親のなわばり内で給餌を受ける(家族期)。巣立ち後はネコに襲われたり、落下したり、車に轢かれたりと様々な要因で死亡し、巣立ち後20日までのヒナの死亡率は40～60%であった。



写真3. 巣の中のヒナ。

4. 食性と採食行動

海岸で生息するイソヒヨドリはフナムシやカニ類を採餌する(与那城1986)。琉球大学構内では、巣内ヒナに親が運ぶ餌の種類は、鱗翅目幼虫、ゴキブリ類が多く、甲虫目、コオロギやバッタなどの直翅目、ミズミズ、ムカデ、ヤモリ、アオカナヘビ、カエル、クワやガジュマルの実などである。成鳥の食性もほぼ同様であるが、ヘビやネズミの仔なども捕食する。巣立ち後のヒナに親がジャコウネズミを与えた記録もある。餌動物を捕獲すると嘴でくわえてたたきついたり、つついたりして殺してから摂食もしくはヒナへ給餌する。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 多様な親子関係

イソヒヨドリの親は巣の中にヒナがいる間はオスメス両方でヒナの世話をする。その際には巣内にいるすべてのヒナを区別せずに餌を与えている。巣内の糞の処理もオスメス両方で行う。しかし、ヒナが巣立ってからは給餌行動が変化する。この時期、オスによる専属給餌(オスだけがヒナに餌をやる)、メスによる専属給餌(メスだけがヒナに餌をやる)、ヒナ分け(ヒナによってオスによる専属給餌を受ける個体とメスによる専属給餌を受ける個体が異なる)の3つの給餌行動がみられる。1994~1996年に集中して観察した15ペアではこの3つの行動が5ペアずつで見られた。ただし、2回繁殖したペアについては1回目の繁殖と2回目の繁殖では行動が異なった。中でもヒナ分けは特殊な親子関係である。ヒナ分けを行っているペアでは、自分が世話をしていないヒナから餌ねだり行動を受けた親は高い割合(80%以上)でヒナを威嚇する。また、ヒナも自分の担当の親に餌をねだることが多い。担当でない親も親であるはずなのであるが、よそのヒナに接するような行動になる。

ヒナ分けなどの行動をみると、それぞれの親とそれぞれのヒナの間ではかなり確固たる認識がされているように感じる。しかし、一方で、3年間の調査期間中に5組のペア間で7個体のヒナの「養子縁組」も観察された。主に隣り合うペアで片方のヒナがもう一方のペアの行動圏に入り込み、そのままそのペアの子になってしまった。これは巣立ち後5日以内に起こっており、それ以降には巣立ちヒナがよその行動圏に入り込むと威嚇される。この時に養子となったヒナは1個体を除いてすべて成長し、分散に至った。

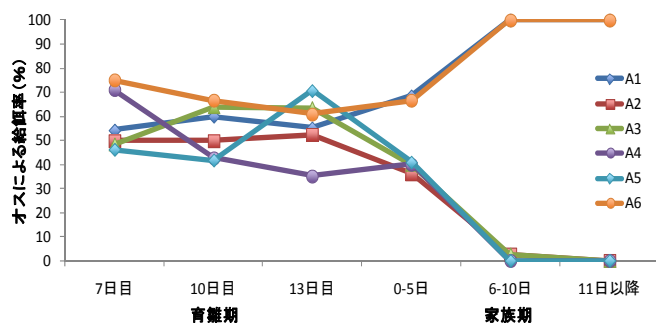


図1. ヒナ分けの例。6羽のヒナ(A1~A6)がオスから受けた給餌の割合(オス親による給餌回数/全給餌回数)の変化を示す。

● 周年維持されるオスのなわばり

オスは周年なわばりを維持する。なわばりの維持は、さえぎり(テリトリーコール)、実際の追い掛け、追い出し行動によってなされる。換羽時だけは目立たないが、その他の時期は常にオスはなわばりの中の高い位置にとまり、見張りをしている。大学構内では高いビルや街灯の上などが格好の見張り場となっている。同時にビルに付属する様々な構造は前述のように営巣場所としても適している。建物での営巣は、雨があたらず、乾燥しているなど構造的な利点の他に、人間が常に行き来しているためヘビや猛禽等の

天敵が近づきにくい効果もあると考えられる。よい営巣場所の確保は次の春のメスの確保に結びつくことから、大学構内のイソヒヨドリは建物を中心としてなわばりを形成しており、密度が高くなると、建物の東西南北の壁ごとに1個体ずつのオスがなわばりを持っているという状況も起こる。

● 美しい鳴き声

イソヒヨドリの特徴の1つは高い周波数の美しい鳴き声である。周波数帯も広く、また、バリエーションも多い。Songは音の異なる複数のnoteによって構成されるが、周波数が複雑に変化するnoteや音の強弱が短い単位で繰り返されるnoteなどを数多く含む。短いsongと長いsongでは使われる場面や機能が異なる。長いsongは他個体に対する直接的ななわばり防衛や求愛など実際に個体間のコンタクトの場面で使われ、短いsongは対象を特定せずに発するなわばりの宣言等につかわれる。これらのsongタイプの使い分けはメスによるオスの選択の際にも機能していると考えられ、オスの繁殖成功にも関わっている。

6. 引用・参考文献

- Dickinson EC (ed) 2003. The Howard and Moore Complete checklist of the birds of the world, revised and enlarged third edition. Princeton University Press, Princeton.
- 柿澤亮三・小海途銀次郎. 1999. 日本の野鳥 巣と卵の図鑑. 世界文化社, 東京.
- 日本鳥類目録編集委員会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 与那城義春. 1986. 沖縄の野鳥観察. 新星図書出版.

執筆者

伊澤雅子 琉球大学理学部海洋自然科学科
松井 晋 立教大学ポスドク研究員

1991年に琉球大学に赴任して来た時に、出身地の福岡では海岸でしか見ることのできなかったイソヒヨドリが学内のあちこちで繁殖しており、かつ人を恐れずに近づいて来ることに驚きました。鳥の好きな学生と一緒に調査をしてみると、その繁殖やなわばり行動など非常に面白い生態をいろいろ持っている鳥であることがわかり、ますます興味が湧きました。本来は哺乳類が専門でイリオモテヤマネコなどの生態研究をしています。【伊澤】

2001年に琉球大学理学部の生態学研究室に所属し、卒業研究として琉球大学構内でイソヒヨドリのなわばりサイズに関する調査を行いました。2002~2009年まで大阪市立大学大学院理学研究科の動物機能生態学研究室に所属し、沖縄県南大東島でモズの生態調査を行い、2010年から立教大学理学部でポスドク研究員として都市で繁殖するスズメの生態を調べています。【松井】



伊澤(前列右)と松井(後列左)。